

筑波大学 環境方針

基本理念

1977年に環境科学研究科を設置するなど、いち早く自然と文明の調和に取り組み、多様な学問分野を持つ、総合大学である本学はその「建学の理念」に謳われている、「国内外の教育・研究機関及び社会との自由、かつ、緊密なる交流連携を深め、学術的な協力の実をあげながら、教育・研究を行い、もって創造的な知性と豊かな人間性を備えた人材を育成する」という内容を踏まえつつ、地球環境との調和と共生を図り、環境負荷の低減に努めます。

基本方針

1. 教育・研究活動を通じ、環境に配慮した心をもった人材を育成します。さらに、その教育・研究成果の普及啓発を図ることにより、広く社会一般の環境保全・改善に対する取り組みに貢献します。
2. 環境マネジメントシステムを構築し、継続的改善を図ることにより環境に配慮したキャンパスを実現し、環境負荷の低減と、環境汚染の予防に努めます。
3. 化学物質の安全管理、省エネルギー、省資源、リサイクル、グリーン購入等を含めた環境目的及び環境目標を設定し、これらの達成に努めます。
4. 環境関連法規、条例、協定を遵守するとともに、自主的な環境保全活動に努めます。

この基本方針は文書化し、本学の教職員・学生および、本学にかかわる人々に周知するとともに、文書やインターネットのホームページを用いて、一般の人にも開示します。



学長挨拶

筑波大学長
岩崎 洋一



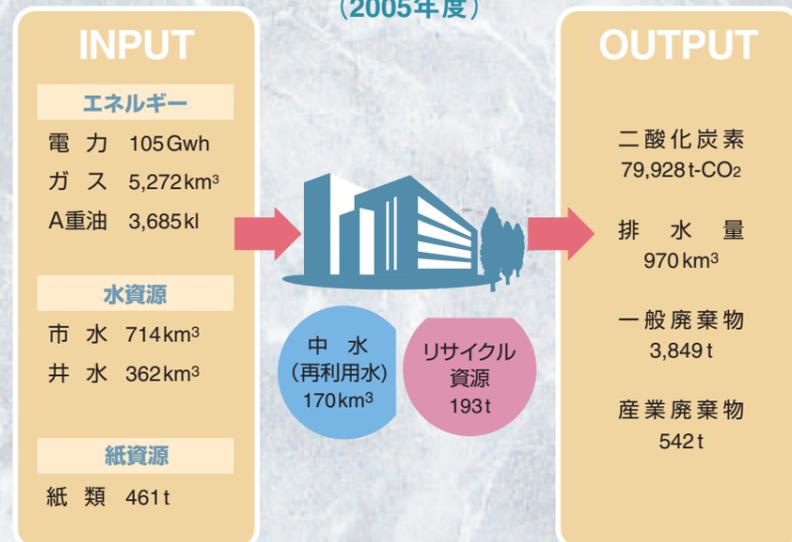
筑波大学は、従来の制度にとらわれない新しい構想に基づく大学として1973年10月に創設され、筑波研究学園都市の中央部に位置し、豊かな自然環境に恵まれた広大なキャンパスを有しています。

筑波研究学園都市は、人と自然が調和した快適な都市の創造を目指して作られた街であり、本学のキャンパスも、自然環境とバランスの取れた空間構成や良好な自然環境の長期的な保全をコンセプトにデザインされています。

本学は多様な学問分野を持つ総合大学であり、既存の分野にとらわれない学際的な教育研究が特色となっています。なかでも1977年に環境科学研究科を設置し、いち早く環境問題に取り組んでまいりました。

筑波大学では、これまでも良好なキャンパス環境の維持や環境負荷の低減に努めてまいりましたが、この環境報告書の刊行を機に、更なる取り組みを進めていきたいと思っております。

環境負荷の状況 (2005年度)



みんなの取り組みで、1%以上の省エネを達成しましょう。

特色ある取り組み

筑波大学の交通と環境問題

筑波大学は全国にも類を見ない広大な敷地を有しており、その中に各施設がバランスよく配置されています。反面、学内移動や通勤通学を自家用車に依存する割合が高く、排気ガス等による環境負荷が懸念されていました。2005年8月のつくばエクスプレス開業と同時につくば市内のバス網が再編され、それをきっかけに、筑波大学内を運行していた旧キャンパスバスに代わって新しい「キャンパス交通システム」が導入されました。

この新しいシステムは、学内を運行する路線バスに何度でも自由に乗降できる「定期券」を、学生や教職員の通勤・通学、業務交通のために安価で提供するものです。しかし、とても便利で快適なシステムではありませんが、バスに乗り慣れていない人や、このシステム自体を知らない人には有効に使ってもらえない場合もあります。筑波大学では、システムだけを作るだけでなく、適切な情報提供などの利用促進策も、併せて実施しています。



学生から見た学内ゴミ事情

筑波大学では年間3,000トンのゴミを排出しています。これは市内8,000箇所ある事業所の年間ゴミ排出量の約11%に相当します。また、筑波大学の学生宿舎には4,000戸を超える部屋があります。特に学生宿舎では、学生のマナーの悪さや分別の不徹底等により様々な問題が生じています。清掃業者の方の苦勞も並大抵ではありません。集積所の外にごみを投げていく人が多く、道路の向かい側にまでごみがあふれることもあります。また、市が粗大ゴミとして扱うものまで燃やせるゴミ袋で出す人もいます。

学内には学生教職員あわせて2万人近くが生活しているだけに、すぐに意識改革や施設整備を進めるのは困難です。しかし、集積所の改善などは大学から、捨て方のアナウンスやマナーアップの呼びかけは学生からというように、お互いが得意な分野を担当し、協力してゴミ問題の解決に取り組む必要があります。



学内組織の取り組み

ISO14001 認証取得施設

筑波大学農林技術センター筑波地区は環境ISO14001の認証を2004年2月に取得しました。地球環境保全が地球全体のためにもっとも重要な課題であると認識し、本センターの教育及び、研究、国際交流、普及・啓蒙、農林生産、事務活動などの全ての活動において、地球環境の保全と向上に誠意を持って対応し行動しています。

エコレンジャー

1997年に発足したエコレンジャーには、現在、生物資源学類の学生を中心に約十数名の学生が所属して定期的に活動を行っています。エコレンジャーの代表的なプロジェクトは、リサイクル市、学生宿舎内の牛乳パック回収システム構築、学園祭環境対策です。

リサイクル市は、卒業生などから家具や家電などを無償で引き取り、新入生を中心に無償で配布するフリーマーケット形式のイベントです。また、学生宿舎内の牛乳パック回収システムを構築し、年間約100kgに及ぶパックがリサイクルされる効果を上げています。学園祭でPSPトリーの回収を行うなど、積極的に関与しています。

今後は大学とも積極的に連携を取りながら、学内のゴミ処理実態調査、留学生対象リース制度の構築などを行っていく予定です。

教育研究活動と社会貢献

環境科学研究科の活動トピックス

環境科学研究科は人間の生存生活環境を学ぶ場として1977年設置され、学際性・公開性・国際性を柱として専門領域の異なる70名余の教員が、多彩な教育実践活動を行っています。

つくば市との連携事業の「環境マイスタープログラム」による環境マイスターの育成や、環境科学の幅の広さを認識し、物事を多面的にみることを学習するために、環境科学実習の一部として、「公害の原点―足尾を観る」(通称足尾実習)を行っています。



桜川市真壁町の伝統的建築物群保存対策調査

平成15年度からの3ヶ年度をかけ、筑波大学の複数の組織に属する教員・院生たちが協力し、桜川市真壁町の古い町並みの保存対策調査を行なった。調査の内容は、町並みの歴史や景観の調査、保存計画の策定など多くの分野にわたった。このうち特筆すべき成果として、明治35年(1902年)の町並みの復元平面図が作成されたこと、町並み景観の色彩調査が行われたことがあげられる。こうして真壁の町並みの特質や価値を明らかにしたうえで、保存計画の方針を提案した。景観保全を柔らかに行う地区と町並みを手厚く保存する地区の二種類を重ね合わせるというものである。今後も住民の方や行政の担当者の方と力を合わせ、より魅力的なまちづくりを目指して努力していきたい。

自然地域計画とは?

自然地域計画の対象には庭や都市公園から国立公園や世界遺産まで含まれる。その計画に際して、自然環境を調査し、保全を提案することあるいは施設設備をすることだという誤解もある。だが、自然地域の存続は社会との関係に依存し、手を加えない場合も既存人工物を撤去して以前の状態に復元・再生するのも重要な計画である。

当初国立公園は特異な景観や現象を楽しめる観光地として展開したが、近年では生物多様性の保全、その価値やその持続的利用の歴史・文化を学ぶ場に広がった。負の遺産も保全されて、解説活動が一層重要になっている。このような利用者の期待する環境の多様化を反映して、レクリエーション機会多様性の概念が活かされている。その実現には利用者の意識や行動の把握が重要となっている。